（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	王　令薇
論文題目	中学生のドラマトゥルギー――社会教育番組『中学生日記』のメディア史		

（論文内容の要旨）

NHK≪中学生日記≫（1972～2012 年）は、「普通」と「日常」を強調するドラマ形式を借りながら、学校外の中学生と大人への啓発を強く意図した日本独特の社会教育番組である。本論文では、「中学生の日常のリアル」を中継するテレビドラマ≪中学生日記≫の機能に着目し、この社会教育番組がどのように視聴者の自主性を引き出そうとしたのか、どのような社会的役割を果たしたのかについて考察している。

これまでの社会教育番組に関する先行研究の多くはその制作意図から内容を論じてきたが、視聴者の受容や社会的影響についての言及は少なかった。また、≪中学生日記≫に関する先行文献において「リアル」な中学生像の提示がその特徴として指摘されているが、いったい何が「リアル」なのか、その「リアル」にはどのような価値観が反映されていたのかは、十分に議論されてこなかった。本論文では、視聴者の関心を集めていた≪中学生日記≫が映す「リアル」の内実の構成に特に注目する。

序章「「中学生の日常」の演出」では、メディア研究や教育社会学研究における本論文の位置づけに加えて、その方法論的枠組みと対象資料が提示されている。理論的枠組みについては、D・マキャーネルの「演出された真正性」（staged authenticity）の概念を参照して、≪中学生日記≫が描き出した「リアルな中学生の日常」を「演出された裏領域」（staged back region）として捉えることの有効性を論じている。

第 1 部では、誰が、なぜ中学生の「裏領域」に関心を示したのか、それに応えて≪中学生日記≫はどのような「裏領域」を提示したのか、さらにその構図は 1970 年代から 2000 年代までどのように変化してきたのかを明らかにしている。そのために全番組の内容（登場人物・ストーリー）のみならず、形式（制作・受容）の変容も考察している。時期区分に関しては、NHK が広報用に作成した紹介文を使い、物語論（narratology）の手法でコーディングを実施し、変化の画期を明確にした。

第 2 部では、≪中学生日記≫がその舞台となる名古屋市の中学生や市民に対してどのような社会教育的機能を果たしたのかを解明する。そのための資料として、≪中学生日記≫の映像、台本、出版物、雑誌・新聞記事に加えて、担当ディレクターなどへのヒアリングを通じたオーラル・ヒストリーも利用している。

第 1 章「「受験戦争」という問題提起―1962～1983 年度」では、≪中学生次郎≫（1962 年度）を嚆矢とする前身番組からの変遷を確認したうえで、≪中学生日記≫のスタート時期の内容、制作側の意図、およびそれに対する視聴者の反響が分析されている。特に「受験勉強」の過熱が問題視され、全人教育を訴える立場から前身番組は企画されたが、≪中学生日記≫になると一人一人の生徒の内面を掘り下げ、生徒と彼らの保護者などの視聴者の自主性・能動性を引き出すことが意識されるようになった。この時期の中学生像は、管理主義のような大人社会の常識にとらわれない存在とも見なされ、大人の体制に挑戦する能動的な姿を描くことが制作者に指向され、視聴者にも受け入れられた。

第 2 章「悩みへの多様な解決策―1984～2002 年度」では、≪中学生日記≫のフレームが競争社会や管理社会などの社会全体を問題視するものから、保護者・教師の個人責任を強調するものへと変化した。それに伴って制作者が追い求める「中学生の日常」の内実も変化した。さらに 1990 年代以降は「受験戦争」という言葉がリアリティーを失い、中学生に「個性」「夢」「やさしさ」「人間性」などを求める内容になった。

第 3 章「ネットに隠れた「中学生の日常」の可視化―2003～2011 年度」では、2003 年のリニューアルを境に、保護者や教師も観る番組から「中学生の、中学生による、中学生のため」の番組に変化したことの意味を分析する。思春期の心身の変化を背景に恋や友情の悩みが前景化し、いじめや不登校などの問題行動が描かれてもその社会的性格は意識されなくなった。つまり、2003 年度以降の≪中学生日記≫における中学生像は、すでに大人に反抗する中学生ではなく、能動的に社会での自立をめざす個人というモデルが示された。

第 4 章「「名古屋」という条件―中学生日記班と地域社会」では、JOCK（名古屋放送局）製作の総合テレビの社会教育番組として、中学生を含む地域住民の参加に着目している。制作者は東京中心の文化発信への対抗文化の可能性を強く意識しており、その実践は名古屋の文芸演劇界にも支持されていた。出演する中学生はもちろん、教育現場の教師や地域の住民など「下」からの声は制作者からも重視されていた。こうした地域との良好な関係性は 1990 年代まで維持されていたことが資料から裏付けられる。

第 5 章「「家庭」「学校」以外の舞台―放送児童劇団と社会教育」では、多くの出演生徒を送り出し、その制作実践を支えていた NHK 名古屋児童劇団（1948 年～）の歴史から考察している。団員生徒の番組出演自体が、生徒の自主性と協調性を向上させる社会教育として捉えられていた。出演生徒の社会的自己（social self）の確立に番組が与えた影響を、その活動と場所の両側面から確認している。

第 6 章「テレビに映った「裏領域」の役割―≪中学生日記≫のメディア論」では、活字メディア／テレビ／インターネット・SNS の比較メディア論の視点を踏まえて、特に総合テレビ放送時代の≪中学生日記≫が果たした社会的機能について総括する。当初は、生徒たちにテレビに映る自分自身のイメージを見る「大人」の視線を意識させることで、社会の規範を内面化させる教育的役割が番組に期待されていた。しかし、こうした大人の視点に必ずしも同調しない生徒は、大人の前で「中学生」の演技を行いつつも、大人を排除した最深部の裏領域を意識するようになった。SNS というニューメディアは最深部の裏領域と親和性があり、「真実性」の演技枠組みの前提となっていたテレビ的な情報環境が揺らいだことにより、この番組もその社会的な影響力を失った。つまり、同番組終了の最大の要因はメディア環境の変動にある。

終章「ポスト≪中学生日記≫の時代へ」では、本論文の全体を振り返り、この番組の「真正性」とは何か、この社会教育番組が日本社会に与えた影響とは何だったのか、この二つの問いに答えている。結局、この社会教育番組は中学生個人の「リアル」を演出することで、生徒や保護者など視聴者に可視化された「中学生」を提示し、中学生と自主性に向き合うことを可能にする装置として企画、制作されてきた。それぞれの時代を背景に生徒や保護者がこの番組を受容することで、中学生の社会化を促した。その意味では、中学校が日本の社会体制に安定的に取り込まれるプロセスでこの番組も一定の効果があったと言えるだろう。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、NHK が 1972 年から 2012 年まで 40 年間にわたって放送した社会教育番組≪中学生日記≫を対象とした初の本格的学術論文である。1962 年度に放送された前身番組≪中学生次郎≫にさかのぼり、NHK アーカイブスの映像資料や放送文化研究所に残された企画書など膨大な史資料に加えて、担当のプロデューサーやディレクターにもヒアリングを行い、教育番組史上でも特筆される長寿番組の全体像を浮かび上がらせたことの意義は大きい。このドラマ形式の社会教育番組に視聴者が何を期待し、それはいかなる効果をもたらしたのか、歴史社会学的手法で丹念に分析している。

まず視聴者が期待したのは、リアルな中学生の日常を理解することだったが、ドラマ形式で描きだされた「リアル」とはいかなる意味をもつのか。この問いに関して、観光社会学者 D・マキャーネルの「演出された真正性」（staged authenticity）を解釈枠組みとして利用している。これにより、≪中学生日記≫が描き出した「リアルな中学生の日常」を「演出された裏領域」（staged back region）として分析することが可能になった。分析においては、E・ゴフマンの行為理論や J・メイロウィッツのメディア論なども援用されており、論理構成において完成度の高い論文となっている。

分析作業の前提として、NHK が広報用に作成した番組内容の紹介記事を月刊誌『放送教育』などから収集し、物語論（narratology）の手法でコーディングを実施して計量分析を行っている。その結果、≪中学生日記≫は内容分析から三つの時期に区分されることを明らかにしている。第一期は 1972 年から 1983 年までの「大衆教育」時代、第二期は 1984 年から 2002 年までの「個性重視」時代、第三期は 2003 年から 2011 年までの「生きる力」時代である。この三つの時期の番組内容を、視聴者の声、制作者の言説から丹念に質的分析を行っている。

こうした社会教育番組が 40 年間にわたり継続して放送されたこと自体、その社会的効果を示すものであるが、本論文ではその効果を学校とメディアとの関係から説得的に提示している。すなわち、≪中学生日記≫は中学生個人の「リアル」を演出することで、学校内や家庭内でも見えにくい中学生の内面に保護者や教師が向き合う視点を提供し、視聴者が中学生と円滑なコミュニケーションを行える環境を整えた。本論文ではそれを「視聴者の自主性を高める装置」と表現している。実際、視聴者がこの番組を通じて、理解可能な相手として中学生に向き合い、中学生の社会化を助けるよう制作されており、そうした社会的効果を確認する記事や証言も集められている。

だが、21 世紀に入って中学生は制作側、つまり大人の視点での「中学生」を演じつつも、大人を排除した自分たちの「最深部の裏領域」をいっそう意識するようになった。それを促したのは急速に普及した SNS である。中学生をふくむ若年層のテレビ離れも急速に進む中で、2003 年の番組改編により総合テレビから教育テレビに移った中学生向けの≪中学生日記≫には、もはやかつての社会的影響力は存在しなくなった。本論文は同番組終了の最大の要因をこうしたメディア環境の変化に見出している。

本論文のメディア文化研究上の学術的意義としては大きく以下の 4 点が指摘できる。

第 1 に、日本の放送文化において特筆すべき社会教育番組≪中学生日記≫の全体

像を教育社会学とメディア文化学の知見の上に描き出した点である。特に、NHK アーカイブスの利用や番組関係者へのヒアリングを通じた調査により、先行文献の評論的な限界を超えた学術的な放送文化研究になっている。

第 2 に、ドラマ形式の社会教育番組で描かれた中学生の日常を「演出された真正性」（staged authenticity）として分析し、その魅力が「演出された裏領域」（staged back region）の提示にあったことを説得的に示した点である。今後のテレビ研究においても活用できる分析枠組みと言えるだろう。

第 3 に、全番組の内容をコーディングにより解析して、40 年間の番組変遷の画期を特定し、その変化の意味を周辺資料から丹念に意味づけていったことである。この量的および質的分析によって、≪中学生日記≫の人気とその衰退を客観的に検証する足場が確立された。

第 4 に、≪中学生日記≫が企画、制作、撮影された NHK 名古屋放送局の「場所」にこだわって、地域の教育界や演劇界などの参加の実態を明らかにした点である。メディア文化もメディア研究も東京一極中心になりがちな現状において、地域から掘り起こした教育放送研究の可能性を示している。

以上の意義を踏まえると、本論文は、中学生の教育社会学と社会教育番組のメディア論を使った精緻な分析によって読みごたえのある教育文化史を描きだした論文として高く評価できる。残された課題として、番組のストーリー分析が中心となり映像分析が不足していること、さらにジェンダー・ポリティクスの視点が十分に反映されていないことも十分に自覚されている。

このような成果と関連して、本論文の質疑では以下のような疑問点や改善点も明らかになった。教師や親など大人側の番組視聴の感想については裏付ける資料があるが、中学生自身がこの番組をどのように観ていたかについては十分な検討がなされていないのではないか。三区分の時代的変遷の中で、日本社会における政治経済上の変化、たとえば「新自由主義」などについても関連性の説明が必要なのではないか。観光社会学に由来する「真実性」の枠組みを放送研究に当てはめることで生じる問題点はないのか。また、「裏領域」の概念規定を洗練させる余地があったのではないか。番組の衰退期である第三期の記述が前二期に比べて薄く、SNS など中学生のメディア環境から説明するのはメディア決定論となっているのではないか、などの指摘があった。

ただし、これらは、必ずしも本研究の欠陥のみを示すものではない。これらは独創的な視点で問題設定されたがゆえに、事後的に見いだされた課題であり、今後に予定されている中学生のメディア文化研究、中国との比較研究の中でさらなる発展が期待できる。

したがって、こうした指摘は、本論文の博士論文としての価値をいささかも減ずるものではない。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 5 年 2 月 15 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降